

1. 弘前城 天守・櫓・門

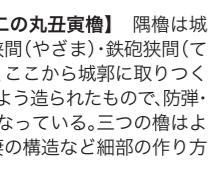
【弘前城跡】 弘前城は、初代藩主為信が計画し二代藩主信枚によって築かれた近世初期の城である。慶長8年(1603)、堀越城を居城としていた為信は、当時高岡と呼ばれていたこの地に新城の建設を計画し城下の町割に着手。為信の没後、その子信枚が遺志を継ぎ、慶長16年(1611)5月、城の大部分が完成した段階で信枚が堀越城より移っている。以後明治に至るまで津軽氏代々の居城であった。全国的にみて、三の丸を含む城郭の大部分がほぼ旧態をとどめている例は非常に少なく、また天守、櫓、門など城郭建築もよく残されており、近世における城郭の規模を示すものとして重要なものである。



【天守】 二代藩主信枚が最初に築いた天守は、寛永4年(1627)9月5日、落雷により焼失したと伝えられている。現在の天守は、九代寧親が櫓造営の名目で幕府の許可を得、文化7年(1810)に完成したものである。本丸東南隅に建つ三重三階の独立天守で、江戸時代後期天守の典型的な一つであり、東北地方に残る唯一の遺構である。



【二の丸辰巳櫓・二の丸未申櫓・二の丸丑寅櫓】 隅櫓は城郭の角に立つ櫓で、これには矢狭間(やさま)・鉄砲狭間(てっぽうやさま)・石落しなどがつき、ここから城郭に取りつく敵を攻撃し、また物見の役に立つよう造られたもので、防弾・防火のため天守同様土蔵造りになっている。三つの櫓はよく似た格好であるが、窓の形や妻の構造など細部の作り方が少しづつ違っている。



【二の丸南門・二の丸東門・三の丸追手門・三の丸東門】

建築年代を示す明確な資料はないが、いずれも江戸時代初期と考えられ、木部をあらわし古式を伝える遺構である。



2. 最勝院

【最勝院五重塔】 寺伝によれば、藩祖為信の津軽統一の過程で戦死した敵方の供養のために建立したといわれている。從来、明暦2年(1656)に着工し、工事の中断と再開を経て寛文7年(1667)完成と伝えられている。しかし、平成3年9月の台風で大きな被害を受け、建立から約330年にして初めての全面解体修理が実施され、その過程で初重の内法貫(うちのりぬき)から寛文4年(1664)8月の刻名が発見された。塔の組立はこのころから開始されたものと推定される。



3. 誓願寺

寺伝によれば、慶長元年(1596)大光寺(平川市)に創立、弘前城築城に際し現在地に移されたという。その後、寺は数度の火災に遭ったが、幸い山門は災禍を免れている。山門の創建年代を特定できる資料はなく、形式から江戸時代中期と推定される。ただ下層の墓石などに室町期の手法もみられることから、はじめ大光寺に建てられ、寺と共に移築されたという伝承も一概には否定できない。



4. 草秀寺

藩祖為信を開基、格翁(かくおう)和尚を開山として、慶長13年(1608)二代藩主信枚により現在地に創建されたと伝えられる。現在の本堂は江戸時代初期の建築と思われるが、慶長15年の建立という記録と建立後ほどなく焼失し再建したという記録もあり、建築年は定かではない。

【草秀寺本堂】 内部は、正面一間を土間とし、一間幅の板張の廊下をおいて外陣、内陣と続く。内陣の背面には、渡廊下で藩祖の位牌堂が接続している。内陣は板張で、来迎柱(らいごうばしら)上に組物をのせ、来迎柱前面に須彌壇(しゆみだん)を置いている。十七世紀初頭の当地における曹洞宗寺院本堂の遺例として、重要な存在である。



【津軽為信靈屋】 死亡の翌年慶長13年(1608)に建てられたとの記録があるが、現在の靈屋はその後に建立されたものと思われる。建立時の江戸初期は質素であったが、文化年間の修理で今のように華麗な姿となつた。

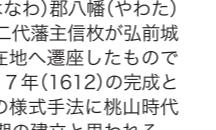


【图像板碑】 この板碑は、大浦城跡丸石垣から出土したものと伝えられている。元来上方に図像、下方に銘文を刻むのが通例であるが、本碑では図像と銘文が並列しており、また阿弥陀如来と大日如来の2仏を彫るなどほかに例を見ない。上部が欠損しているものの特異な形式であり、南北朝期の仏教信仰の一端を示す資料として貴重である。



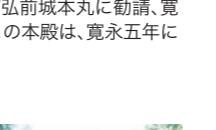
5. 弘前八幡宮

草創は不詳であるが、もと鼻和(はなわ)郡八幡(やわた)村(弘前市)に鎮座していたものを、二代藩主信枚が弘前城の鬼門の押えとして慶長年間に現在地へ遷座したものである。社伝によれば、唐門共に慶長17年(1612)の完成とするが、墓石・手挾(たばさみ)などの様式手法に桃山時代の特徴がみられることから、この時期の建立と思われる。



6. 弘前東照宮

元和3年(1617)二代藩主信枚が弘前城本丸に勧請、寛永元年(1624)現在地に移された。この本殿は、寛永5年に建立されたものである。



7. 熊野奥照神社

社伝によると、奥尾崎(中泊町小泊地区付近)に創建され、延暦7年(788)扇野庄(弘前市付近)に遷座。大同2年(807)には坂上田村麻呂が蝦夷征討にあたって祈願した神社であるという。その後いくたびか堂舎の造営がなされたというが、定かではない。本殿は、慶長18年(1613)二代藩主信枚が再建したもので、細部手法もこの時期にふさわしい。



8. 青森銀行記念館(旧第五十九銀行本店本館)

明治12年1月弘前市本町に設立された第五十九国立銀行は、明治30年に改組して株式会社第五十九銀行となつた。この建物は、同行の本店として明治37年に完成した。設計および施工は、当時名匠といわれた弘前の棟梁堀江佐吉で、和洋折衷手法の優れた明治建築である。



9. 弘前学院大学(弘前学院外人宣教師館)

明治19年弘前教会内に開設された女学校に始まり、明治22年発足した弘前女学校を母体とする。外人宣教師館は同校に派遣された米国帰人宣教師の宿舎として建設されたもので、現在の建物は明治39年に登記されている。設計施工は弘前のクリスチヤン棟梁桜庭駒五郎と伝えられる。この建物は外人宣教師館の様式を知るうえで貴重であり、北奥の洋館として優れた建築である。



10. 弘前厚生病院(旧弘前偕行社)

明治29年に弘前市に設置が決定された第八師団将校らの親睦・厚生施設として、九代藩主親王の別邸があった九十九森(下宿)に明治40年6月起工、11月に竣工した。工事請負は堀江佐吉で、長男彦三郎、六男金蔵が棟梁として現

場を仕切った。佐吉は同年8月に病没したため弘前偕行社は佐吉の遺作となった。



11. 袋宮寺

弘前市茜町にある熊野宮(本殿は県重宝)の別当寺であったが、明治初期の神仏分離により廃止されて現在地に移った。なお、本尊の十一面觀世音立像も県重宝に指定されている。



12. 圓明寺

圓明寺は、明応8年(1499)油川(青森市)に創立され、後に藩祖為信に寺禄を賜って弘前に移り、現在地には慶安3年(1650)に移ったといわれる。現在の本堂は、火災焼失後の仮本堂として明和元年(1764)に再建したと伝えられ、県内に現存する浄土真宗の本堂建築としては最古のものである。平成16年度から建立後初の解体修理を行い、当初復元を基本とした整備が行われた。



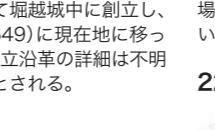
13. 報恩寺

明暦元年(1655)江戸で死去した三代藩主信義の菩提を弔うため、翌2年に四代藩主信政が創立したものである。以後、歴代藩主の菩提寺となつたが、数度の火災に遭い、現在の建物は宝永元年(1704)の信義50回忌に当たって再建されたことが棟札によって知られる。現在、藩主の墓塔は長勝寺に移転しているが、藩主の肖像影刻も市指定文化財となっている。



14. 本行寺

藩祖為信が京都の日建上人を迎えて堀越城中に創立し、後に弘前寺町に、さらに慶安2年(1649)に現在地に移ったものと伝えられる。また護国堂の創立沿革の詳細は不明で、建立年代は享保元年(1716)ころとされる。



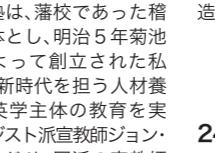
15. 旧青森県尋常中学校本館

明治22年に弘前市に誘致された青森県尋常中学校の本館として、明治27年に落成した。弘前中学校時代などを経て新制高校に変わり、昭和33年の新校舎建設の際、主棟の玄関を含む中心部分を残して「鏡ヶ丘記念館」と名付けたものである。



16. 旧東奥義塾外人教師館

東奥義塾は、藩校であった稽古館を母体とし、明治5年菊池九郎らによって創立された私学である。新時代を担う人材養成のため英学主体の教育を実施し、メソジスト派宣教師ジョン・イングをはじめ、同派の宣教師が次々と教師として着任した。そして明治23年に外人教師用の住宅が建てられたが、これは32年に焼失し、翌33年に再建された。弘前における外国人の生活様式を知る上で貴重な建物である。



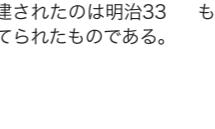
17. 旧弘前市立図書館

工事業者齊藤主や堀江佐吉らが、日露戦争による利益還元を目的に建設して市に寄付したもので、設計・施工は堀江による。明治38年着工、39年竣工。ルネサンス様式を基調としながらも、寺院建築に見られる木鼻を用いるなど和風様式も取り入れている。棟梁堀江佐吉の創意と工夫が随所に施された、弘前市の明治期を代表する洋風建築である。



18. 日本聖公会弘前昇天教会教会堂

日本聖公会の教会堂が現在地に創建されたのは明治33年だが、現在の教会堂は大正9年に建てられたものである。



設計は愛知県犬山市の明治村にある聖ヨハネ教会(国指定重要文化財)と同じくアメリカ建築家のJ・M・ガーディナーによるものとされている。



26. 吉田松陰来遊の地・松陰堂

嘉永5年(1852)、吉田松陰と宮部鼎蔵の2人は弘前藩の儒学者伊東広之進(号梅軒)宅を訪ね、藩の軍事や教育について説明を受け、また国事を談じた。明治39年、伊東広之進旧宅を隣家の医師伊東重東が購入してここに養生幼稚園を創立するとともに、松陰らが会談した部屋を「松陰室」と命名した。現在は幼稚園から切り離されて、伊東広之進旧宅のうち玄関から座敷(松陰室)にかけての部分が保存され、今日に伝えられている。

27. 成田家庭園

大石武流第五代宗家池田亭月により昭和7年(1932)に作庭された。母屋の西側に設けられた、書院前の約70坪ほどの平庭式枯山水である。武学流庭園の中でも小規模ながら、池田亭月が作った枯山水庭園中、代表作とも言える。



28. 貞昌寺

【貞昌寺庭園】 元禄間に四代藩主信政に召抱えられた京都の数寄者、野本道玄と伝えられる「一文字の庭」を巧みに修復した縮景式筑山泉水庭園であるが、庭園本来の特色、庭の趣が充分生かされている。全国的に珍しい様式で、津軽の庭園文化の流れを辿るためにも、貴重な庭園である。



29. 西光寺

【木彫阿弥陀如来立像】 中世奥羽の浄土宗布教で名高い金光上人が、外ヶ浜の川(蓬田村阿弥陀川とも言う)から引き上げて祀った、という伝承をもつ像である。制作年代は江戸時代以前か。細かな造作を見せる身光の背骨と台座は江戸時代後半の補作である。なお、西光寺には文化13年(1816)に江戸京橋の仏師小林長五郎が制作した金光上人の坐像も伝来している。



30. 専修寺

【餓死供養名塔】 天保の飢饉のための供養塔と思われる。津軽地方は、たびたび飢饉に見舞われ、特に、元禄・宝曆・天明・天保年間は大飢饉となり多数の餓死者が出し、津軽の四大飢饉といわれている。専修寺の付近は、施行(求)小屋が設けられ、また、餓死者を埋葬した場所とも伝えられていることから、非業の死を遂げた人々を共同で供養した篤い信仰心を知ることができ、歴史および民俗資料としても貴重である。



31. 旧制弘前高等学校外国人教師館

木造二階建の端正な洋風住宅で、背後に平屋の附属棟が続いている。建築当初は、敷地内にもう一棟並んで建てられ、二棟の間取りが左右対称につくられていた。



32. 新寺町

【新寺町】 慶長17年から19年にかけて、一代藩主信枚は城の南方に溜池(現弘前大学医学部グランド付近)を構築した。土居を築き貯水したもので、南溜池と呼ばれた。溜池一帯は城下の南限であった。慶安2年(1649)の寺町大火後、溜池の

